

「高井」第六十五号別刷

普代遺跡発掘調査

中野市教育委員会

## 普代遺跡発掘調査

中野市教育委員会

はじめに

乳幼児保育の發展と拡充をめざして、中野市東山（普代）の荒井敏雄氏所有の地主あとに法人の「ひよこ保育園」が移転新築されることとなり、昭和五七年四月開園をめざして五六年一月より建設工事が着手された。現地は繩文—弥生—土師の遺物散布地として確認されていたので、県文化課の指導をうけた際、表面採集では、濃厚な遺物散布が認められなかったので「丁張り」を設定し、調査必要箇所の発見された時点で緊急発掘を実施するようにとの指導をうけ、市教委の岩戸主事が工事立合い中、工事場の西北地点より埴器台の出土を確認したので直ちにその附近の工事の中止を申し入れ、一二月一日—三日の三日間、寒風と雪の中を緊急発掘と記録保存をすませた。

### 立地と環境

普代遺跡は、中野市誌によると繩文時代以降の遺物が発見され、下高井教育会が昭和一四年八月刊行した「下高井郡の先史時代及び歴史時代概観」（主任神田五六）によると、現在高社高開拓団の慰靈碑の建つ平地より太形始刃石斧の出土を記している。遺跡の範囲



第1図 遺跡の位置

は、北は北村高圧KK社地から、南方は今回調査地点までの山で、山腹の緩急斜面まで続くと想定され、現在の普代区の住宅地・寺地などが含まれ、先史時代から現在に至っていると思われる。立地する傾斜は一五度—二〇度、西方に開け、調査地点で標高約三八〇m、中野扇状地面との高差は約一〇mである。中野平へだてて北信五岳が突に均整のとれた姿で眺望され、印象的である。

東は鶴ヶ岳（六六三m）でさえぎられるが、こゝは高架地の大規模な山城址として有名であり、山腹には平安時代末に成立した「今

は、北は北村高圧KK社地から、南方は今回

の調査地点まで

の山で、山腹の

緩急斜面まで続

くと想定され、

現在の普代区の

住宅地・寺地な

どが含まれ、先

史時代から現在

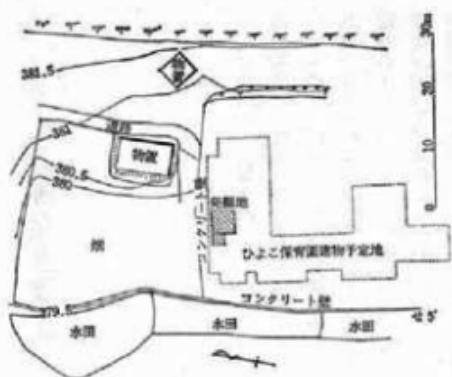
「古物語」に載る如法寺(真言宗)の広大な寺域がある。

出移動が考えられ、遺構の存在が予測される。

北西約五五〇mに高窓小館跡跡があり、南西約一〇〇mには小田中東遺跡があり、昭和四六年駄宮町野南部地区調査整備事業施工中に遺構、遺物が発見され、弥生後期（稍清水式）から土師器高窓期、国分寺の住居址が検出されている。

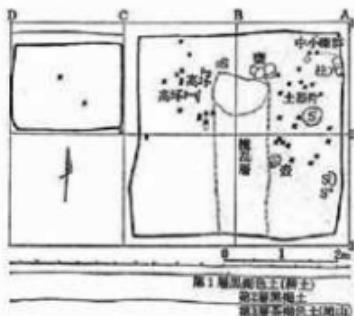
地質は安山岩の風化した黄色土が下層をなし上層は有機質の含んだ黒色土が、屑端部に接する地形上層に厚く堆積している。

遺  
稿



第2図 グリット設定図

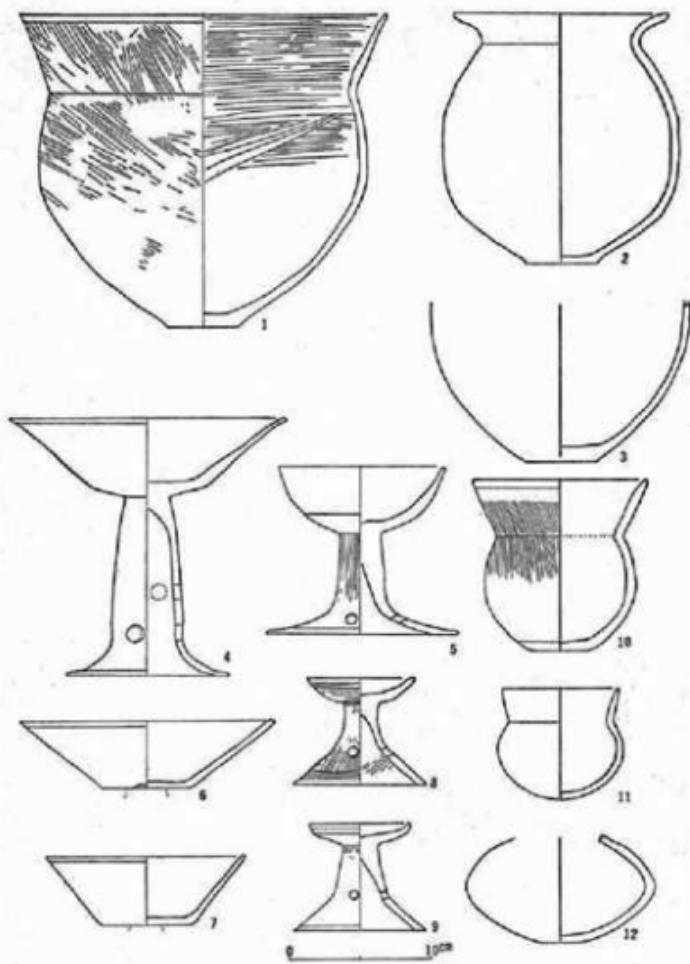
まず先に出土品のあった地点より北側にグリフトを設定し、発掘を開始した。有機質の含んだ土を除くと栗林式の土器片、椎文の土器片が出土した、あまり察知が進んでいないと観察され、ごく近くの遺物面よりの速撃を開始した。



第3圖 遺構測量図

・C<sub>1</sub>グリットからは土器片が発見されたが、C<sub>2</sub>グリットからは遺物が確認されなかつた。これに続くC<sub>3</sub>グリットからは立合いの時点での高坏一、埴一、器台一が検出された。遺物の年代から推して炉址の存在が予想され、住居址のプランなど不明な点が問題であるが、單一の住居址の一つ

日程その他の制約から六グリットの調査にとどまつたが、敷内地内の基礎の根掘りの状態を観察した結果、外に遺構・遺物の検出をみなかつた。A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>のグリットの中央部は巾一mに亘つて地主荒井氏の經營された養鶏場の建物の基礎部分で擾乱されていたが、推定表土より五〇—六〇cm（調査時の深さ二〇—三〇cm）より、B<sub>1</sub>グリットより更破片、埴一、甕一、A<sub>2</sub>グリットから一個体分などが孤をえがく様に配列されて検出された。遺物包含土層は基盤の黄色土層より二〇—三〇cm浮き上つた状態で検出され、前述の如き状態と重つて遺構面の検出は困難で柱穴一ヶ所検出され



第4図 遺物実測図

遺物

ヲトとして認定した

高杯(第4図4)脚部が柱状を呈する器形で脚部にうすくクロクロ整形のあとが残り、杯部の内部にもうすいハケのあとなどが見られるが、表面は丁寧にラ磨きされている。脚部と杯部は別に製作され、ボゾにて接合の後、直徑約六・五寸の円形の部分を作り出し、段を作つて杯部を大きく開かせている。脚部には一对の穿孔があり、焼成は良好である。

高杯(第4図5)前

者と違つて坏部より底部が大きく開き、坏部は桶状を呈し、中央に接合の時出来た押し凹みがある。脚の立あがり基部に四個の穿孔が、対になってあけられている。ロクロ成形の後、ハラ磨きされている。焼成は良好である。

壺（第4図2）胎土中に石英粒など多量に含み一見粗雑な感じをうける。輪づみロクロ整形の後、腹部はやゝ荒いササラ状工具で縱方向に荒く整形して、引き締めて止めた箇所は器面が荒れている。また火熱をうけて熱づんでおり、煮沸に使用されたとする焼成土器とすべきであろうか。

器台（第4図8）ロクロで整形され脚部のサ・ラ状工具面は右まわりに施されている。サ・ラ状工具は巾九段程で浅い六筋程の横目紋様となって整形されている。脚部の立ち上り部分に等間隔に三個の穿孔があり、器面は赤褐色で堅く焼成されている。

器台（第4図9）8とはほとんど同形であるが受皿部が8に比べて浅い。

壺（第4図10）製作技法など器台と似ているが、胎土に砂粒の大きなものが含み粘土あまり精選されていない。内外とも褐色を呈し、日常の被器として使用されたと思われる。器高の約1/3の部分よりくびれ、口縁部は外反している。

壺（第4図11）立会調査中に出土した薄手に作られ赤褐色を呈しロクロ整形など製作技法に優れている。小形品に属する。

壺（第4図12）高壺（第4図6・7）は説明を省略する。

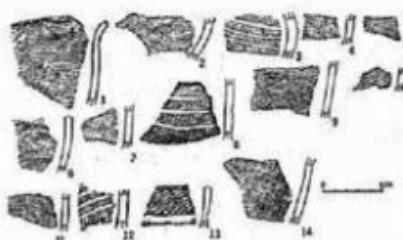
壺（第4図1）ロクロで整形後内外をハラで良く磨いている比較

的薄手で赤褐色を呈し堅く焼成されている。

壺（第4図3）胴部以下の残存で全形は不明。一見粗雑な感じの出来で器面にムラがあり、サ・ラ状工具で簡単に整形されているだけである。

その他の遺物は拓本によって図示した（第5図）、1・5・7・9・10は飾文の系統で、1は流水文の手描で中部高地型で断絶痕がある。5は輪描文の字文様、7は格子目文、9は平行直線文類、10は平行曲折線文（波状文）である。2・3・4・6・8・12・13は栗林式土器の破片で、2は輪づみ技法で外面にこまかいハケ目を残す、3は壺の破片でLR縦文を窓でU形沈線に磨消している。4は表面は輪目とともにハケ目ともつかぬ平行文で内面は堅い。6は壺の口縁部で口縁部にLR縦文が施されている。8

・12は壺の破片で沈線文とLR縦文が組合される。13は壺の二重口縁部で口縁部までLR縦文を施す。11・14は土器の破片であり、これを除いた破片は栗林式文化の土器に属し、これらは土器のセト土器の上層より出土した事は先述の通りであ



第5図 拓影

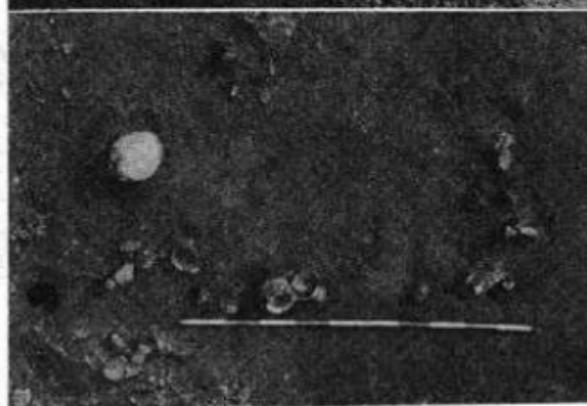
1 遺跡全貌



2 壺・壺出土状態



3 遺構



る。  
むすび  
この普代遺跡の古式土器と同時期の遺跡は中野市では安澤寺、  
島軒割などで、あまり多く確認されていない。この一因として住居  
址が集中的に存在せず、一定の距離の保たれる拝敬方式をとる為と

も考えられる。また器台の出現は箱清水式の宋朝からとされ、脚部  
の比較的長い高杯は、群馬県の立田川式土器にも見られ、壺状の  
高杯の併出、脚部の穿孔は前代からの遺存が認められ、新井大ロフ  
遺跡（和泉二期）になると脚部の穿孔は消失している。台付壺、有  
段口縁の壺など併出しなかつたが、供獻形態、煮沸形態の土器が出

土し、住居址のセットとして把握されよう。この土師器の編年位置は、北信では柳原健氏の調査された柳町期に属し、佐沢浩氏は善光寺平第一様式を提唱し開創年の五箇期に対せされているが、この中半頃に位置づけるのが適当と考えられる。(柳原健氏)

調査関係者 中野市教委 藤沢親義・岩戸啓一・小野昭男

中野市文化財保護協力員 池田実男

註 1 金井義次 中野市誌 古代の中野

2 これと同形の器台を飯田市恒川遺跡出土品で発見した。また飯山市須多ヶ原からも出土している。高橋桂・大田文雄「北信善光寺多ヶ原第二次発掘調査報告」(信濃)一九一四昭五一

3 尾崎喜左衛門・石川昭四三

4 長野県中考古古科課、主要道路 昭五七

5 柳原健「北信善光寺後柳町遺跡調査報告」(信濃)一九一四・五・十二・昭三一

6 佐沢浩 善光寺平における古墳時代以降の集落

遺跡の立地の基礎的研究 資料一九一四

資料は中野市歴史民俗資料館に保管されている。

C

C